

使徒言行録 21 章 1-16 節

「霊の狙いは？」

本日の箇所は、第三回伝道旅行の終わりに、いよいよエルサレムに上る、その直前のパウロの姿が語られています。もし、自分が行こうとする場所で、敵に捕まり、引きずって行かれ、投獄されてしまうという幻を見せられたら…皆さんはどんな選択をするでしょう？ほとんどの方が、道を変えるでしょう。同様に、自分の大切な人への警告がなされたら、行かないように言うでしょう。4 節で、パウロの同行者たちが「“霊”に動かされ」て、エルサレムへ行かないように繰り返し語っています。アガボまで、遠くからやってきて、パウロの帯を取って警告します。

けれども、パウロは真逆の反応をします。「主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです(13節)。」と。さて、この時の聖霊は、いったい何を狙っていたんでしょう？パウロをエルサレムへ行かせることが目的なのでしょう。それとも行かせないことが目的だったのでしょうか。とにかく周りが止めても、「いいえ、そこへ行くことが私に与えられた使命です」とパウロは譲りません。そしてパウロ自身も、聖霊を受けているのでタチが悪い。果たして、このまま行かせるのが正解なのか、やっぱり止めるべきなのか、分からなくなります。

結局、どう言っても心変わりしない相手に、言えることは一つです。「主の御心が行われますように」。実は、聖霊からお告げを受けても、神様から幻を見せられても、この先起こることを預言されても、それによって、何が求められているのか、何が命じられているのか、最後まで分かりません。それでも、パウロの覚悟から教えられるのは、信仰者の交わり、特に自分とは違う思いを持っている人との交わりが、私たちの信仰の生命を保つためには不可欠だ、ということです。交わりは、ただ自分の弱さへの補いや助けを受けるためではなくて、神様の御心を本当に求める者へと作り変えられていくために必要なのです。本日の箇所には、パウロ自身が良い交わりに生きていた姿が描かれています。5 節では、ティルスの信者たちが共に浜辺にひざまずいて祈っています。共に祈ることにこそ、信仰者どうしが神様の前で一つとされる交わりがあります。カイサリアでも、信者たちはパウロの身を案じ、エルサレムに上ることを思い止まるように願いました。

私たちは、聖霊の導きを求めます。聖霊による気づきや、警告や、促しを求めます。しかし、同じ聖霊を受けていても、何を促されたと感じるかは人それぞれです。あなたに聖霊が働いたとき、あなたが正しく、その働きを解釈できるかは分かりません。もしかしたら、大勢が、聖霊によって止められたと思ったことが、むしろ止めてはいけなかったことかもしれません。しかし、大事なことは、聖霊の導きを、正しく受け取ったとしても、誤って受け取ったとしても、最後まで付き合い続けてくださるという信頼です。パウロがエルサレムへ行くことを促したにせよ、止めようとしたにせよ、彼らに降った聖霊は、この後も、彼らが行く場所、留まる場所に、一緒に居続けてくれました。聖霊によって、ある時は間違いに気づかせ、ある時は自信を付けさせ、揺れ動く私たちの間で、神さまの御心が行われるよう、付き合い続けてくれました。今も、その働きは続いています。泣いたり、心をくじいたり、神様の意志とは異なる道を勧めようとする私たちにも、聖霊は、慰めと、気づきと、勇気をもたらそうと、呼びかけ続けてくださいます。どうか、自分を絶対視しない誠実さと、安易な答えを出さない自制心、はっきりした「しるし」がなくても信頼できる信仰が、一人一人育まれますように。